

愛の渦潮

(第二十四作)

猶惟寿昭
なおいとしあき

阿波踊りの当日、徳島市内は興奮の坩堝と化していた。ホテルも旅館も一月も前から満室だったが、伊坂緑子は祭りの一週間前から市内に住む兄の家に泊めてもらっていた。

毎年八月中旬に開催されるこの夏祭りのために、主要な道路には有料、無料の演舞場が設置され、演舞場と演舞場を結ぶメインストリートが大童で整備される。当日これらの道路を、「連」を組んだ沢山の踊り子グループが、飛び入りの見物客を交えて三味線、太鼓、鉦、横笛を使った「二拍子」の伴奏に乗って大移動していったのだ。

男は半天を身に付け、男物の浴衣を尻はしよりに着て練り歩く。振り回す大きな踊りで、時には滑稽に、時には勇猛に、うちわや手拭いなどを使って低い姿勢で踊りまくる。

一方、「女踊り」の方は、涼しげに浴衣を身にまとい編笠を深くかぶって、厚化粧をし、草履ではなく下駄を履いて、上品に艶っぽく踊る。裾除け・手甲を付けて、黒緋子の半幅帯を結ぶ艶やかな姿が魅力的だ。

緑子も生まれて初めて、兄夫婦の誘いに乗って、町内会の有志で組織された連に入れられ、浴衣姿で踊りの列に連なつたのだ。確かに「見ると「踊る」では大違い。編笠で半分顔が隠れているから恥ずかしさは直ぐに忘れることができるから、大勢の人の渦の中で賑やかな三味線・太鼓などの楽器が奏でる激しいリズムに浮かれて次第に興奮してくるのだ。体の中を流れる血が騒ぐのが分かる。

その祭りの喧噪も終わって間もなく、秋風が立ち始める。今年の夏は短い。

「お義姉さん、随分とお世話になりました。一週間ほどの心算が、この一夏をゆつくりと過ごさせて頂いてしまつて」

庭で採れた胡瓜と茄子を新聞紙に包みながら、台所から半分顔を覗かせて恵子は緑子に言う。野菜は東京に帰る緑子へのお土産なのだ。

「私も緑子さんと一緒にこの夏を過ごせて嬉しかったわよ。あなたも東京のマンションに戻ったら暫くは忙しいのよね」

「ええ、我儘言つて会社を半月近くも休んでしまったから、社長から沢山仕事を押し付けられるでしょうね」

「社長さんて、女性の方だわよね。大手出版社の辣腕編集長だったそう

ね」

「ええ。かつて私もその出版社にいた頃には、彼女の下で大いに鍛えられたわ。三年前に彼女が今の小さな出版社を起業したときに、私も誘われて会社を飛びだした訳ですよ。今は多少後悔しているけど、当時私も上司の男性や同僚との反りが合わず、人生最悪の状態でしたからね」

緑子は今もまた直ぐには癒しがたい挫折を味わい、心がぼろぼろになっている。だから、兄夫婦の住む徳島の田舎町に癒しを求めに来ていたのだ。兄には相談し難いことも、同じ歳の兄嫁の恵子には昔から何でも言い易かった。

勤務している小さな出版社の名目上の社長、西濱敏子は気心も知れた友人と言うより姉のような存在だった。緑子も出資しているから共同経営者という関係でもある。緑子と敏子の事務所、と言っても駅前の小さなマンションの三階に借りている二〇坪強の部屋なのだ。そこに若い女子従業員二人と営業の男子社員一人を雇って細やかな出版の下請け業務を行っている。

普段はしっかりした性格の緑子が社長の西濱敏子から、「いつまでも逃げていては駄目よ。夏休をたっぷり上げるから、鋭気を養ってきなさいよ。九月の始めまでには戻ってきてね」と言われ、その言葉に甘えさせてもらっての休養休暇なのだ。

緑子が妻子ある男性との恋愛を解消して落ち込んでいると信じている敏子からの慰めの言葉に、黙って俯うつむくしかない。別に緑子は男性との不倫関係に悩んでいたわけではなかったが……。

「それにしても貴女あなたは本当に男運が悪いのね。私も偉そうなこと言えないけど」

実際、二度も離婚を経験している敏子からこんなことを言われたくはなかった。

東京に戻れば、孫請けしている中世美術史に関する書籍の編集と校正の仕事が待っている。ミッシヨン系の女子大で中世美術に関する学士論文を書いた経験を見込まれたのだ。

「お兄さんにい、長らくお世話になりました。一両日中には東京に戻ります。又お邪魔させて貰うようになるかもしれないけどね。徳島は、というよりお兄さんやお儀姉ねえさんの居る家は居心地がいのよね」。久し振りに夕食の時間に家に戻ってきた兄の雄大に挨拶をすると、

「うちはいいけど、お前もそろそろ落ち着かなければな。仕事のこともそうだし、そろそろ結婚の話はないのか。今度お見合いでもセットアップしようか」と兄らしい愛情に溢れた辛口の返答が返ってくる。

雄大の方向違いの言葉に義姉あねの恵子が助け舟を出してくれる。

「緑子ちゃんね、仕事に打ち込んで結婚どころじゃないのよ。仕事だからいいことばかりじゃないけど、仕事の苦勞も生きがいなのよね。すっかりリフレッシュして東京に帰る妹の気持ちにもっと親身になって上げてよ」

「お前と恵子はまるで本当の姉妹みたいに仲がいいな。それにしてもお前は半月近くも仕事を放り投げていて大丈夫なのか。パートナーとは巧くやっているのか。色々心配している兄の身にもなってみろよ」

今回の滞在中も忙しい兄とはほとんど話をする機会がなかった緑子は義姉あねの恵子を独り占めにさせて貰っていることを内心で兄に感謝をしていた。そのことは兄も十分わかつているのだ。

雄大は妻の実家がある徳島市内で印刷会社を経営している。東京で大手旅行会社の営業マンだったが、一昨年亡くなった義父の事業を引き継いでいたのだ。夫婦ともに結婚以前から長く住み慣れた東京を捨てて、妻の故郷に転居した兄は、妻思いで優しいのだ。緑子にとって兄嫁である伊坂恵子は、その結婚以来五年の間、ずっと親しく付き合う間柄で、何でも信頼して相談できたから、彼らが東京を去った後はとても寂しく心細い緑子だった。

徳島の兄夫婦を訪れる度に、緑子は市内の最大観光名所の眉山びざんに登っている。登ると言っても、高德線徳島駅から徒歩六〇〇メートルの眉山ロープウェイ山麓駅から七分で山頂駅に着く。今回も、徳島に来て三日目に登ったのだ。山頂から徳島市内を眺めると、何故か緑子の気持ちが落ち着くのだ。箱庭のようにこじんまりとした市街の広がりや、どんよりとした厚い空気に覆われた東京のような高層ビルの林立する大都市のよそよそしさで迫ってくることはないのだ。

徳島市のシンボルである眉山は、「眉まゆのごと雲居くもいに見ゆる阿波あわの山……」と万葉集にも詠まれている。山頂へはロープウェイが通じ、徳島市街はもとより、天気の良い日には淡路島、紀伊半島までもが一望できる。東京に戻る準備を昨夜の内に済ませ、緑子は今日一日をのんびりと鳴門海峡見物で過ごそうと決めていた。兄夫婦の住む徳島市内からはバスに乗って小一時間で鳴門市に行ける。

緑子が二日後に東京に戻ることになり、義理の姉の恵子が今日の渦潮見物に付き合ってくれたことになった。恵子自身、船に乗っての観潮は未経験だったのだ。二年前に、二人は鳴門海峡に架かる大鳴門橋の車道の下橋桁内に造られた海上遊歩道から、怖さに足を震わせながら一緒に覗き込んだことがあった。何しろ海上四十五メートルの遊歩道には、透明のガラスでできた床が付設されているからそれはそれでスリル満点の観潮を楽しめるのだ。

今回、小型水中観潮船に乗って鳴門の渦潮を見物したいと言い出したのは緑子だが、恵子も嬉しそうに同行を即答して二人分の乗船券を買ってくれた。二人は四十人を超える観光客と一緒に乗り込む。甲板から階段を降りて、水中展望室になっている船倉の大きく開けられた窓に沿って並ぶ。目の前には水面下一メートルの世界が広がっている。渦潮の起こす海流と泡で水は白く渦巻いている。緑子が想像していた以上の臨場感に胸が膨らむような気がする。船は鈍いエンジンを船倉内に響かせながら、小刻みな揺れと、ゆっくりとしたうねりを乗船客の体に伝えていく。

船が動き出して直ぐ、緑子は胸が圧迫されるように息苦しくなり、思わず隣の恵子にしがみついた。体が大渦の中に吸い込まれていくような予感に押し潰されそうになったのだ。

「大丈夫よ、緑子ちゃん。この感覚にもすぐ慣れるし船は安全に出来ているから。それに二十分もすれば観潮ツアーも終わりだから」

そう言いながら緑子の肩を強く抱いた。周囲の客は嬉しさを声に出して水中からの渦潮見学を楽しんでいる。

「お義姉さん、何だか胸がむかむかしてきて気持ち悪いの。眼が廻るみたいだわ」

「もう直ぐだから、私にしっかりつかまっています。窓の外なんか見なくてもいいのよ。疲れが出たのかしらね」

恵子の片腕を強く掴むようにして緑子は目を瞑った。一昨日の夜、兄夫婦に連れて行かれた小料理屋で食べたフィッシュカツの味に、ちよつと違和感を覚えたことを思い出していた。不味かったわけではないのだが、舌に安手の白ワインを飲んだ時のような刺激がちよつぱり残ったのだ。

瀬戸内海と太平洋の境目に位置する鳴門海峡では、沖合から西へ伝播されてきた潮汐によって、瀬戸内海の入り口である紀伊水道で海峡南側

へ到達して満潮を迎える。地球の自転と共に東から西へ移動する月の引力によって海面が引き上げられ、潮位が上がる。それが渦潮を形成して、今緑子たちの乗った舟を大きくうねらせ回転させているのだ。

潮の満ち引きは、太陽や月の引力などによって発生するが、月の引力は地球に近い分特に大きな影響力を及ぼす。緑子の体の中心部分が、この瞬間にその引力に引きずられて大きく揺れ出しているようだった。

「おお義姉さん、ごめんなさいね……」

緑子の恵子の右腕を両腕でしがみつく力が痛いほど強くなるのを感じた。恵子も緑子をしっかりと抱き抱えながら赤子をあやすようにその頬に自分の頬を擦りつけた。その時、緑子も恵子も二人がこうして抱き合っ
て過ごした五年前の夜のことが思い出されてくるのだった。恵子が緑子の兄との結婚を決めた頃のことである。

当時恵子が住んでいた東京のマンションに緑子が食事に招かれて行ったとき、これから親戚同士になる二人が意気投合して飲み始めたお酒を、緑子が少々度を過してしまったのだ。緑子がふと目を覚ますと、恵子のベッドの上で横たわっている自分に気が付く。ベッドの下には恵子が毛布にくるまって寝ていた。

その時に起こったことは、魔が差したというべきなのか、起るべくして起こったことなのか、緑子にはいまだに判然としないている……。

ふと目覚めた緑子がベッドから起き上がると、恵子が直ぐに寝返りを打って緑子の方を見上げてにっこり笑うのだ。

「お義姉さん、ごめんなさい」と言って、緑子がベッドから降りると、恵子が両手を上げて自分の寝ている毛布に招き入れた。

「いいのよ、緑子ちゃん。もう私たち二人は義姉妹の間柄になるのだから何も遠慮は要らないのよ。私の方こそ、あなたの大好きなお兄さんを私が奪い取ってしまうようで申し訳ないと思っっているのよ」

「大好きだなんて……。兄は兄ですから。でも兄が恵子さんと一緒になるなんてとても嬉しいですよ」

恵子は緑子の首の下に片腕を入れて横向きになって体を寄せ、じつと緑子の目を見詰めた。恵子の視線は熱気を帯びた不思議な強い引力で緑子を捉えた。いつの間にか恵子は緑子をしっかりと抱き寄せている。驚いたことに、恵子の薄いネグリジェの下のおくよかな二つの乳房が緑子の薄い胸を圧迫するように包み込んでいるのだ。

「緑子ちゃん、今夜はこのまま義姉妹の仲を確かめ合いながら眠りましようね」

眠るとはいえ、実際に二人が眠りについたのは窓際のカーテンの向こうに、うっすらと夜明けを知らせる日の光が差し込み始める頃だった。緑子の中のもう一つの人格が姿を現し、二人の結びつきが義理の姉妹を超える関係となる夜となったのだ。枕元のバスタオルに沁み込んだ汗の匂いと二人の体に残る気だるい疲れが、昨夜の激しい営みを記憶していた。

徳島県の鳴門市から淡路島にかかる大鳴門橋。その真下で轟々と音を立てて渦巻く鳴門海峡の大渦潮は、緑子にとつて義姉の恵子に初めて熱く抱擁された時の怪しいめまいを思い起させる。緑子は、もう水中観潮どころではなかった。立っているのが辛く感じられる。

晩夏の午後の陽ざしの暑さが、季節の変わり目の体に疲労感を増幅させた所為もあった。下船してトイレに駆け込んで胃を落ち着かせてから、港の待合室の椅子に腰を掛けて休んでいると、少しずつ緑子の体調が戻ってくる。

安心した恵子が笑いながら言った。

「一瞬だけど緑子ちゃんが妊娠しているのかと嫉妬してしまったわ」

「いや〜ね、お義姉さんたら」と緑子ははにかむ。

恵子は緑子が女として男性を受け入れる性格や体質を持ち合わせていないことを見抜いていた。恵子自身は緑子のような女性に対して強い愛を感じながらも、異性に対する男女の営みにも抵抗感はないのだ。だから雄大との結婚生活も普通に巧くいつている。

「満員の船倉の中での閉塞感が原因だわよね」と、恵子は優しく緑子の肩を抱く。

月は地球の自転と共に、東から西へ移動する。今緑子はあたかも自分が月になったみたいなき分でいる。鳴門海峡では、月の引力によって海面が引き上げられ、潮位を上げながら月の運行を追いかけていく。緑子は恵子の気持ちに沿って、恵子の言う通りに動かされているような気がしている。

本州と四国の間にある瀬戸内海と太平洋とを結ぶ海峡は、幅が一キロメートル以上もある。潮汐により日に二回、大量の海水が瀬戸内海に流れ込む。同様に一日に二回瀬戸内海から流れ出す。瀬戸内海と太平洋の

水位差は最高で一・五メートルにも及ぶから渦が生まれるのだ。この海水の渦が、恵子と過ぎたあの夜の熱く強い抱擁を緑子に思い起こさせたのだ。恵子にも緑子の気持ちはよく分かっていた

鳴門海峡の潮流は、海峡の幅が狭いだけでなく複雑な海底の地形も影響して、時間に最大二十メートルの速度で流れる。この潮流の速度は日本が一番速く、緑子が学生時代に行ったイタリア半島とシシリー島間のメッシーナ海峡、北アメリカ西岸とバンクーバー島東岸との間にあるセイモア海峡と合せて「世界三大潮流」にも数えられるほどののだ。この激しい潮流から発生する轟音ごうおんから鳴門（鳴る瀬戸）の名が生まれたと言われているくらいなのだ。

二人だけが取り残された待合室で、恵子は緑子を落ち着かせるために話し出した。

「鳴門海峡の特徴は、大小二つの渦潮が出来ることよね。渦潮で最も大きいものは北側から南側に流れるもので、直径が十五メートルにもなるのよ。反対に南側から北側に流れる方の渦潮は十二メートルくらいね。

潮流に沿って右側には右巻き、左側には左巻きの渦が巻いて、出来た渦は、互いに合流し合って大きくなり、ぐるぐる回りながら右は紀伊水道、左は播磨灘はりまなだへ流れていって、やがて消えてしまうのよ。そして又新しい渦が生まれるの。この間数十秒」

恵子は自分と緑子との抑えがたい情熱の逆ほしほしりを思い出している。

「鳴門海峡の北側が満潮になると、南側は既に満潮を迎えてから約五時間以上が経過して干潮となっているのよ。それによって南北に水位差が生じ、潮位の高い方から低い方へ、つまり北から南へと潮が流れるの。この流れが「南流」と呼ばれるのよ」

恵子の言うように、引き潮は、中瀬なかせと呼ばれる岩礁がんしょうのあたりがもつとも激しく、潮は無数の段をなして流れてくる。その速さは稲妻のようで、その音響のすごさは雷が轟とんくようだと言われられる。

「あの時の私が緑ちゃんに抱いた熱い熱情のように、どうにもならないほど強い力なのよね。鯨が魚を追いかけ、サメやワニが巣の奪い合いで争うような激しさなのよ。次から次へと飛び散るしぶきで辺りの海は真っ白になって、まるで綿を敷きつめたり浮かべたりしているようなのだ。

海面の下から大量の塩や雪が噴き出しているようにも見えるんだわ」

言いながら恵子は自分が緑子に対して初めて経験した、甘く激しい衝動を思い出して噛み締めていた。以来二人は機会あるごとに甘美な秘密

の時間を持ったのだ。

潮流見物の船着き場を後にして徳島市内の恵子の家に戻ると、恵子は一休みしてから台所に立って夕飯の用意を始める。

「うちの旦那、昨日から出ている北海道への出張が一日延びて今日も帰宅しないから、二人だけでお酒を呑みながらすすき焼きでも食べてのんびりしましょうね」

緑子も頷きながら応える。

「それじゃ私がお風呂の用意をしますから、食事の前にさっとお風呂に入りましょう」

緑子がお風呂場の掃除を終え、浴槽よくそうに水を張っている間に、恵子は食卓の準備をしながら語り出した。

「雄大と私が結婚しているのに、その妹の緑子ちゃんと私が特別な絆で結ばれることになったのだから、私って悪い女なのよね。私みたいに男性に対するように女性とも愛し合うことができる人間を見ると、汚きたない、狡ずるい、欲張りなどと思われてしまうわね」

「難しいことはよく分からないけど、所謂いわゆるLGBTのことよね。同性愛者や両性愛者、トランスジェンダーの人々の話題を新聞紙上でも最近頻繁に目にしますよね。自分がレスビアンだということに私が目覚めたのは女子校に入って直ぐの頃だったわ。思春期の頃から男性には全く興味が湧かなかったんですものね。それに一つ年上の美人女子校生の一人から、とても仲良くされて、二人してお互いの家に行き来しては一緒に泊まって過したりしてたんですよ。でも、本当に大人の女性同士としての愛に激しく突き動かされたのはお義姉ねえさんが最初かも知れないわ。お義姉さんがバイセクシュアルだって分かったのはお義姉ねえさんに初めて逢ったときなんです」

「そうね、私が初めて雄大に誘われてお宅に伺った時よね。私も緑子ちゃんの視線の中に、心に突き刺さるような何かを感じたのよ。こういうことって本能的に分かってしまうんだわね」

恵子に促されて緑子が先にお風呂場に入って湯船に浸かっていると、突然というか、緑子の期待通りというか、恵子がタオルも持たずに裸身を露わにして入ってきた。

「お邪魔するわね」

「お義姉ねえさんは本当に着痩きやせするタイプなんですよね。裸になるとその

豊かで真っ白な胸が神々しいくらいで、本当に惚れ惚れしてしまいますわ。いつものようにお義姉さんのこの膨らみの間に顔を埋めてしまいたい。兄になんかにお義姉さんをもう渡したくはないわ」

恵子は黙って緑子の細い体を両の腕で抱きしめ、頬に唇をそっと押し付けた。

入浴後浴衣に着替えた二人は熱燗のお酒をチビチビと飲みながらすき焼きに舌鼓を打った。後片付けも早々に、食堂とベッドルームの間の六畳間に布団を敷き、浴衣を脱ぎ捨て下着も取り去って、未だ酔いの残っている体を二人して横たえた。

布団の中で恵子に優しく抱かれていると、緑子は昼間船の上で経験した渦潮の動きに合わせて体がぐるぐる回る感覚が思い起こされた。恵子を抱く緑子の力が一層強くなった。目が、頭が、体全体が廻っている。このまま海の底に引き込まれてしまうのだろうか。お互いの両腕が相手の体を締め付ける。――このままずっと恵子と一緒にいたい。もう東京に、西濱社長のいる東京の事務所にも、戻りたくはない――

頭の中で阿波踊りの喧嘩が甦ってくる。経験のない緑子に、練習と称して優しく女踊りの型を、体を密着させるように恵子が教えてくれたのを思い出す。恵子の体の温もり、息遣いが緑子に怪しい戦慄を引き起こす。

部屋全体が轟々と音を立てて回っている。瀬戸の大渦潮の周りを緑子と恵子は二人して抱き合いながら回っていた。もう直ぐ緑子は恵子と一緒に瀬戸の海底に沈んでしまうのだろうか。甘美の奈落に……。

(本文文字数 114 文字)